時代の眼

社会福祉と国際化

仲　村　優　一

国際化ということばがよく使われるようになったのは，ここ十数年来のことではなかろうか。今日，我々の日常生活の多くの面で，「国際化」がはやりことばになっている。たとえば，経済の国際化，教育の国際化，のごとくである。そして，福祉についても国際化の重要性がうたわれるようになっている。国民生活のあらゆる面で国際的依存度の高いわが国が，世界の平和と進歩に寄与しうる健全な発展をとげるためには，国際化，つまり，目を世界に広げて国際的になることこそが，そのための欠かせない条件の１つである，というのである。

「国際化」は，英語でいえば internationalize, internationalization であり，これは立派に辞書に出ていることばである。そして，関係を国際的なものにすること，というような説明がついている。しかし私自身，国際社会福祉会議に長いこと関わってきた経験に照らしてみると，国際場裡で「国際協力（の重要性）」ということは昔からよくいわれてきたが，「国際化」に相当することばは，ほとんど全くといってよいほど使われていないのである。

反対に，日本語の辞書を見てみると，もともとは国際化ということばは出ておらず，最近になって取り上げる辞典が見られるようになった（たとえば，岩波書店「広辞苑」第４版，1991年）。しかも，その説明は「国際的な規模に広がること」となっている。つまり，ごく最近における流行語としての「国際化」を辞典も無視できなくなったことを示している。そして，「国際化」がきわめて日本的な色彩の濃い独特のニュアンスをもって使用されていることを物語っているものといえそうである。たとえば，「日本はもっと国際化しないと，国際的な孤児になってしまう」といった文脈で国際化がいわれるのは，そのよい例である。

ところで，国際化を国と国との間の関係づけとしてとらえると，その関係づけは，人，情報，カネ（モノ）などを通して行われる。そして，日本と諸外国との関係で見ると，国際化には大きく分けて３つの局面が存在する。第１は，諸外国から日本の内への「内向き」の国際化である。第２は，内から外への「外向き」の国際化である。第３は，内から外へ，外から内への相互交流，相互関係的国際化である。そのうち，今日強調されているのは，いうまでもなく，第３の局面における国際

化の促進である。

このことを社会福祉との関連で見ると，どうであろうか。これまでの日本の社会福祉は，情報を外から内へ，つまり，海外から情報を集めて日本の社会福祉の開発に役立てようとする内向きの国際化の線が圧倒的に強かった。しかも，その場合の「外」は欧米諸国の比重が極端に大きかった。海外視察の目的で，第二次大戦後今日まで一貫して，多くの人びとが海外に出かけている。しかも，これまではその大半が欧米の社会福祉事業の視察であり，開発途上地域，特に日本がその一員であるアジアの社会福祉に目を向けてそこに出向いていく日本人はきわめて少なかった。

こうして外向きに多くの「人」が出ていくのも，日本の社会福祉の発展に役立つ情報を集めるという内向きの志向であり，外に出向き，そこに腰をすえて，向こうの社会福祉に貢献する活動を展開するためではなかった。最近になって，日本のNGOの先進・先駆的な諸活動が注目されるようにはなったが，まだその活動の比重は先進諸外国のそれに比べて微々たるものである。従って，第3の局面の相互交流，相互関係的な国際化にいたっては，まだきわめて不十分な状態が続いている。

また，第2の内から外へ向けての国際化の作業の一環として考えられる内から外への情報提供，すなわち，日本の社会福祉（社会福祉研究をも含めて）についての情報を海外に積極的に提供する作業が微弱に過ぎる。わが国の社会福祉の理論・方法・制度等についての情報を海外に向けて積極的に提供するとか，それ以上に，国際的に検討と討論の場にさらして相互批判の機会を積極的に求めるということを，日本の社会福祉は怠ってきたのである。こうして生じている情報の極端な片貿易を国際場裡で調整する作業を進めることも，社会福祉の国際化の大きな課題である。

たまたま，日本学術会議の社会福祉・社会保障研究連絡委員会（16期，一番ケ瀬康子委員長）では「社会福祉における国際化」をテーマに1992年から研究を進めている。また，日本社会福祉学会では1993年度の大会（上智大学，1993年9月4，5日の予定）のテーマを「国際化時代の社会福祉とその課題」と設定し，シンポジウムを行うことになっている。社会福祉と国際化に関する新しい展望が開かれる研究の成果を期待したいものである。

（なかむら・ゆういち　淑徳大学教授）